

緒 言

萩野利彦

山形大学医学部整形外科

小児が肩関節の疼痛や変形を主訴に医療機関を訪れることは多くはない。小児整形外科疾患の代表的な教科書である「Tachdjian's Pediatric Orthopaedics」をみても、小児の肩関節疾患の記載は一部の疾患に限られており、その全体を記載した項目はない。

一方、肩関節外科の代表的な教科書である Rockwood and Matsen の「The Shoulder」の本をみると、肩の先天異常の項目の記述はあるもの、小児の肩関節疾患全体についてのまとまった記述はない。このことは小児の肩関節疾患の頻度が高いものではないことを示唆しているように思われる。

子供の数が減少している中で、実際の外来診療において外傷以外の小児の肩関節疾患を診察する機会は稀である。しかし、稀な疾患であるが故に診断に難渋したり、その結果、適切な治療の時機を逸する可能性がある。また、適切な治療が行われない場合に障害が一生続くことも考えられる。

本誌上シンポジウムは、2009 年に開催された第 36 回日本肩関節学会のシンポジウムの演者で、小児整形外科あるいは肩関節外科の専門家で各領域でご活躍中の先生方に執筆をお願いした。小児の肩関節疾患と小児の肩関節に障害を与える可能性のある疾患の最新の知識を執筆していただき、誌上シンポジウムという形でまとめることにより、これら疾患に対する知識を新たにすることを目的とした。上述の理由により、これらの論文の一部は雑誌「肩関節」に発表されたものである。

今回の企画が読者の先生方の小児の肩関節疾患についての理解を深め、日常の診療において役に立つことを願っている。